

JIRON KOHROH IV

右翼台頭で前途多難

国際アナリスト

甲斐正史

ドイツ・メルケル政権4期目 が背負う重い「十字架」

9月24日にドイツで行なわれた総選挙で、キリスト教民主・社会同盟

(CDU)が第一党を維持、アンゲラ・メルケル首相(63)が4期目の政権を担うことになった。

メルケル氏の政権続投は予想されたものだったが、注目されたのは新

興右翼「AfD」(ドイツのための選択肢)の大躍進だった。

メルケル氏率いるCDUは大幅に議席を減らし、中道左派の社会民主党(SPD)も大敗、AfDだけが議席を増やした。

大衆迎合主義的なAfDは、メルケル氏の寛容な移民政策の不満の受

(ドイツ首相府)



総選挙で勝利、4期目に突入したメルケル首相

け皿となり、90を超える議席を獲得した。こうした過激な右翼進出は第2次大戦後の混乱期を除き初めてで、現代ドイツ政治の「転機」とも言われるほどだ。このまま推移すれば、彼らがやがて議席を独占する日も遠くないと見られ、欧州諸国から危惧されている。

欧州では極右勢力が伸長している。フランスではマリヌ・ル・ペン氏が党首として率いる国民戦線(FN)が台頭、先の大統領選の第1回投票では3位に食い込み、注目された。

ここ数年、移民やIS対応でクローズアップされ、ドイツ、フランスではことに若年層を中心に政府の柔軟策に反対したことが、台頭の背景だ。

フランスでも極右台頭、やがて欧州全域に蔓延の恐れ?

一部専門家は「このまま放置、推移すれば、欧州は極右に牛耳られ

る恐るべき日が来るだろう」とも予測している。

フランスの場合、結局FNが予想されたほど伸びず、どうにかマクロン氏が押さえて大統領に就任した。

EUの大国ドイツは難民流入、テロ、英国のEU離脱と、多くの難題に直面したが、12年間、舵取りを担ったメルケル氏に、さらに欧州のリーダーとして手腕を発揮してもらいたいものだ。

欧州各国では独仏の他、自国第一・反EUを唱える大衆迎合主義(ポピュリズム)的政治努力が台頭、EU崩壊の危機、との危惧さえ広がつた。マクロン政権誕生後、真っ先に行なつたのが、メルケル氏との間でEU統合強化に向けた独仏連携の確認作業で、世界は一応安堵した。

日本とドイツは自由、民主主義、法の支配などの普遍的価値観を共有しており、ドイツ―EUの安定は日



総選挙で大躍進を果たした極右AfDの2人の党首、フラウケ・ペトリー（上）とイェルク・モイデン氏（下）

本の国益にも強く結びついている。

だが、油断は禁物だ。ドイツのAfDは、メルケル政権に対して執拗に政権奪取を試みるであろうし、AfDを支持する中に若年層が意外に多いのには驚かされる。

台頭の転機になったのは2015年の欧州難民危機だった。難民移民の大量流入を受け、メルケル氏の寛容な難民政策を批判して勢力を拡大した難民、移民による事件、事故が各地で相次ぎ、社会不安が高まる中、地方選で議席獲得を積み重ねた。

この国では過去にも極右が台頭した例はあるにはあったが、CDUが保守色をやや強めたこともあり、AfDの国政進出だけは何とか防いでき

た。

AfDは「反イスラム、ユーロ離脱」、ナチス讀える集団も

しかし、AfDは「反イスラム」など排外的主張やユーロ離脱を掲げ、メンバーの中には、かつてのナチス・ドイツの責任を回避するような発言をする者がいる他、若年層ではナチスを讀めるケースまで現れ、警戒感を強めた。東部ライプツヒではAfD支持者と見られる若手グループが、AfDの旗を先頭にデモ行進、国民の亀裂を醸成して来た

逆にベルリンでは「ナチに権利はない」と抗議デモまで開かれ、複雑な様相を呈しているが、「政権を追い立

てて国を取り戻す」（ウラント副党首）と、メルケル政権への戦いは捨てていない。

「世界最強の女性」と呼ばれるメルケル氏だが、「神通力」にも陰りが見え始めているのは事実だ。

常と比較されて来た「鉄の女」サツチャー元英首相の任期（11年半）をすでに超え、米誌フォーブスに6年連続で「世界で最も影響力のある女性」に選ばれた。

カリスマ性はなく、演説もさして上手なわけでもないメルケル氏。だが、物理学者出身らしく、状況を常に熟慮、数多い難問にそのつど「解答」を導き出して来た。

激しく相手と対決せず、一定の譲歩もいとわない。「相手の環境を伺い、結局生き残る」（シュレーダー前政権幹部）と彼女を評価している。

動く時は大胆そのものだ。党の幹事長時代にはヤミ献金疑惑が浮上した恩師のコール氏を、真つ向から批判した。メルケル氏の判断は世論の「風向」を巧みに読んだの判断で、一面したたかなところも見せる。

遊説先では、民衆からトマトを投げつけられることもあった。そのメルケル氏が4期目、AfDと

どのような対決を今後進めていくのだろうか。低調な論戦が場合によっては、AfDの過激さを際立たせる、の批判も上がっている

続投に関しては「権力の傲慢」、「もう望まない」の意見が世論調査にも現れている。

メディアも厳しい。すでにメルケル後継者の話も出始めているという。

「アメリカ・ファースト」を強調するトランプ米大統領とも議論が噛み合っていない。彼女の慎重さも原因だが、「静」のメルケル氏が、「動」のトランプ氏にいかにか立ち向かうのか、国連やEUを非難し続けるトランプ氏との駆け引きも微妙だ。

メルケル氏はG7の古参格となり、リーダー格としてこれを牽引する重責も担っている。さらに国内でも極右対応に当たらねばならず、課題は山積している。

EUでは、ロシアへの経済制裁問題と、まさに「欧州の要」的存在だ。

日本は海洋進出を続ける中国と対抗して行く上でも、EU、ことにドイツとは協調すべきパートナーだ。

そのためには、安定したドイツ・EUの実現に向けて、メルケル氏に手腕を発揮してもらいたいものである。